

閉会挨拶

中島 隆信 氏（内閣府統計委員会担当室長）

ご参加の皆さま、大変素晴らしいこのシンポジウムを閉会する時間となりました。本日は著名なリーダーの方々にお越しいただき、イギリス、オーストラリア、中国、韓国、アメリカ、イギリス、そして国連と、そうそうたる統計局の方々に豊富な経験に基づいて議論をいただきました。

皆さまが意欲的にオープンに行動や課題について議論なさるのを聞いて、意を強くしています。統計制度をいかによりよく設計するかということで、熱心なご議論をいただきましたが、これは間違いなく重要な一歩で、完ぺきに設計され、国際的に調和された公的統計制度に向けて、前進となったことと思います。グローバル化が進んでおり、また市場経済が拡大する中で、公的統計の役割を収斂させていく時期になったと思います。

公的統計は、農業や世帯に対して統制をするために、昔の経済下では重要な役割を果たしていましたが、現代社会では、多様な人々がさまざまな文化背景を持って、いつでもどこからでも市場に参加しています。そのため、公的統計の重要性がよりあいまいになっています。市場参加者は正確な情報を、現状を知るために求めます。グローバル経済の現状を知るために求め、時間遅れで発表される公的統計は望まれておらず、また場合によっては、公的統計が信頼されないということがあります。

その一方で、世帯は、世帯自身で何が起きているのか、あるいは近隣で何が起きているのかに関心を持っています。同時に、市場経済のメリットも享受しています。雇用といった意味でも、また所得といった意味でも関心を持っています。しかしながら、調査の回答者としては、「放っておいてほしい」「あなたには関係ない」という態度を取りがちです。

今日の議論を聞いて、やはり公的統計の新たな概念が21世紀において必要とされていると痛感しました。これは次のような形で表現できると思います。統計とは、個人そして企業を支援するものであるということです。例えば、体にどこか悪いところがないか発見し、健康を維持するために行う健康診断と比較することができると思います。しかし、健診だけでは十分ではありません。診断項目の数字は、私たちにとっては理解できないものだからです。医学によって、どういった診断を受けるべきか、そして結果をどのように解釈をするべきかが分かります。公的統計についても同じことがいえて、社会科学

がなければ処方せんを書くこともできませんし、望ましいグローバルな政策につなげていくことができません。従って、科学的な統計を指針としまして、最適な公的統計の構造を作っていくということ、これがすべての人々の厚生に大きな貢献をもたらすと考えております。

今日ご参会の皆さまは、全員が統計をよりよくするという目標に向かっておられると思います。この目標に到達するためには、多くの人々からの英知を拝借したいと思いますし、単に専門家だけではなく、例えば民間人、学生、そして子供たちといった一般の人からすらも知恵を借りて集め、統計を面白いと感じてもらおうようにする必要があります。そういった意味で、このシンポジウムが輝かしい改革の歴史、そして国際協力の歴史の端緒となることを願っております。21世紀における日本の公的統計の国際協力などの輝かしい端緒となることを願っております。

では、これにて閉会といたします。